

春の稲作の風習

石戸谷 勉

(日本民俗学会会員)

今回は、戦前ころまで行われていた春の稲作に関する風習を取り上げたい。

本県では、津軽地方は、古くから稲作が行われてきたが、南部・下北地方は、平地が少なく畑作が主体であった。南部地方の古くからの水田は、沢に沿って細長く上流まで続くのが特徴で、沢水は冷たいので、収量は多くなかった。下北地方は冷涼な気候なため、稲作が本格的に行われるようになったのは大正時代からといわれ、それ以前は水田でヒエが植えられていた。

田の神や農神は、秋に山や天に帰り、春になると里を訪れると考えられた。下北や南部地方では、旧暦3月16日を農神様が種を持ってくる日とするところが多い。東通村では、朝早く家の戸を開けて、杵と臼で米を搗きシトギを2個作って供えた。米を搗く音を聞いて農神様が来るので、先を争って搗いた。津軽地方では、田の神が山から来る日は一定せず、3月3日(中泊町今泉)、1

6日(平内町内童子)、4月8日(五所川原市石田坂)ともいわれる。

山の残雪模様や花の開花等、各地域の身近な自然現象は、農時の目安となった。例えば岩木山、八甲田山、釜臥山などの雪形で農時を知り、津軽地方では、コブシやモクレンを「田打ち桜」といって、この花が咲けば田打ちの時期だった。ウツギは「田植え桜」で、たくさん咲けばヨノナカ(稲の作柄のこと)がよいと、豊凶占いにも用いられた。菖蒲の花をソトメと呼び、早乙女が立ち働く田植え時の象徴でもある。南部地方では、農耕の経験をもとに、風の吹き方や天候から、その年の作物の豊凶の占いをする古老を「ヨノナカジイ」と呼んで、畏敬の対象とされた。

稲の苗を育てる苗代に関しては、苗印の風習が知られる。これは、苗代の中央に葦や竹等を×やハ状等に立てるもので、本数や形状は家によって異なる。新郷村西越では、竹のネジルシ(苗印のこと)を×状に立て、苗がネジルシまで伸びると田植えができたという。これは、東日本一帯にみられるもので、古くは、田の神の依り代であったろうと考えられる。

田植えは旧暦5月に行われたので、ゴガツと言われた。田植えの日には、ミナクチ(水口)に供え物をして豊作を祈願する水口祭りを

行い、「虫がつかないように」、「水が不足しないように」と祈った。下北地方ではフキの葉の上に餅・赤飯・御神酒を、津軽地方では小豆飯・ニシン・ワカメ・御神酒・塩などを供えた。

地区の田植えが終わると、集落をあげての数日間の農休みとなる。津軽や下北地方では、サナブリというのに対し、南部地方ではテノリ(テンノリ)といった。津軽では、暑気と呼ぶために

サナブリ太鼓を連日打ち鳴らした。この期間には、虫送りも行い豊作を祈願した。

今回取り上げた事例は、農業の進展と生活様式の変化により、今では失われたものも多いが、本州最北の地において、様々な工夫や知恵を重ねて暮らしてきた人々の暮らしの一端を垣間見ることができよう。



市浦村(現五所川原市)相内の虫送り=1969(昭和44)年6月・青森県史デジタルアーカイブスより